

篠塚教授の急逝をいたむ

学 長 加 藤 寛

篠塚教授を知ったのは、千葉商大に赴任する時、以前から私淑していた矢島鈞次元東工大教授が、千葉商大なら篠塚という人物がいるので紹介しておこうということで、三田のNECの本社ビルの近くの日本料理屋でお目にかかることになった。会ってびっくり。篠塚さんといえば、かねてから小人数の平岩元東電相談役の会合で耳にしていた名前であった。矢島さんが篠塚さんの名を出すとき、いつも一つの例を付け加えた。「篠塚というのが面白いことをいうのですよ。日本でなぜ社会主義が理想社会と言われるかということ、マルクスがスミスの後に出てきて、資本主義は矛盾があって崩壊するから、そのあとで出現する社会主義は資本主義よりよい社会であると思込んでいる。この独善をやめなければいけないと彼はいう。A・C・ピグーは『社会主義対資本主義』という小著の中で、同次元で二つの体制を比較して論ずるということをして、社会主義が資本主義よりすぐれているというのは正しくない」と論じた。にもかかわらずピグーもまた資本主義は社会主義に転化すると結論づけたのだから、社会主義理想論は根強い。篠塚さんはこの教え方を直すべきだと主張し、高校教科書改定案を提供してるんですよ」と。

なるほどこれは卓見だと思ったが、篠塚さんは高校の教育から変えようといくつか自分のテキストを編じていた。彼の伶俐な頭脳は、難解なJ・ロールズの『正義論』の共訳を成し遂げていた。まことに精魂こめて訳されたことがよくわかるのは、この翻訳の公刊された後、さらに訂正版を自らの費用で出版されるなどまさに学究の徒であった。

どちらかといえば私を好意的に迎えてくれた彼に、私はついつい頼ってしまった。当時の千葉商大のコンピュータ・システムは旧式でこれでは立ち後れると思った。今では情報専門の教授も増えたので、運営のやり方をすっかり上山教授にお任せし、やっと落ち着いたが、それまでは、篠塚教授に業者同士のいやな争いの調停をお願いせざるを得なかった。先生は何とか私を助けてやろうと考えられたようだ。生来酒豪の先生にはお体を悪化させる重荷を負わせてしまったのだと今頃気づいたが、時すでに遅く、平成17年12月13日ついに力尽きたのはまことに申し訳なく思うと同時に、先生に頼りすぎたことを反省させられた。

先生の業績は、他の先生が触られるので私はこれ以上述べないが、ミクロの厚生経済学など、いまの経済学の分野で重要でありながら軽んぜられている領域も篠塚さんのなされたお仕事の大きな分野であった。千葉商大の学生がその重要な経済学の分野を直接お聞きできなくなったことは残念でならない。

先生の先生であった矢島鈞次先生は、中国語をマスターされ、とくに台湾問題では、すぐれた後継者を育てられ、異色の経済学者であったが、篠塚先生も単なる理論家であるよりも現実の経済分析にずいぶん関心をもっておられたので、おそらく晩年になれば、もっと現実の経済問題を身近にとりあげて世に発言する存在になったのではないかと、勝手に想像し、若くして世を去った篠塚さんが千葉商大にとって輝く星になったのにと惜しまれてならない。

しかし、酒が好きで煙草が好きでという先生のことだから、早く去られたことを残された私たちが惜しむよりも、ご本人はかえってさばさばしたと喜んでおられるのではないかと思います。それほど明るく人生を豪快に送った方だと思ふことにしている。